

TEEP

進化型実務家教員
養成プログラム

VOL.2

NEWS LETTER

実務家教員の重要性は広く認識されています。その一方、実務家教員の明確な規定は無く、抱くイメージが人により異なっているのも事実です。私たちは、この状況を各分野各所で既に多くの実務家教員が教育、研究、社会貢献等を担っていることの証左であると考えています。TEEPコンソーシアムは、実務家教員が次代を切り開く積極的な役割を担う段階にあると考え、「進化型実務家教員が居る社会」を実現すべく動き始めています。このNews Letter「TEEP」では、実務家教員の多様性を重視し、現役の実務家教員、大学・大学院、実業界等の視点から「実務家教員の現状と進化」を発信していきます。今回は、TEEPコンソーシアムを構成する4大学のプロジェクトリーダーに投稿いただきました。（文・鶴飼宏成）

《進化型》実務家教員の居る社会 ～ TEEPの視方～

名古屋市立大学
大学院経済学研究科 教授
TEEPコンソーシアム
実施委員会 委員長
鶴飼宏成



進化型実務家教員に期待する役割

進化型実務家教員養成プログラム(Training for Evolutionary Evangelist Program: TEEP)では、実務家教員像を、大学などでの学びが仕事の現場でどの様に活かされているかを、自身の経験に根差して伝える以上の役割を担う者と置いています。想定している役割とは、第1に「学生が主体的に探求できる学びを創出する」こと。これは、実践に即したアクティブラーニングの場で、学生が学び方を学んでいく学修プロセ

スづくりでもあります。第2に「新領域での課題解決を担う」こと。企業や地域で生じている正解が分からないテーマを前にプロジェクトを起し、リーダーとして取り組むことです。ここでの気づきを教育と研究にフィードバックします。第3に「産学官民連携の共有環境を創出する」こと。正解が分からないテーマが多くなっている昨今、年齢も所属も問わず自らをバージョンアップすることが欠かせません。その現場を新領域に求めます。

イメージは、変化し続ける現場で 混沌を楽しみ切り開く《野武士》

立教大学の中原淳教授は、「大学を卒業し職業人になってから要求される能力は高まる一方なのに、大学教育がこれに追いつけず、両者の『段差』が広がっている」と指摘しています(2019年9月23日付 日本経済新聞)。誤解を恐れずに理解すれば、社会的に人材育成が追い付かない時代を意味しています。私は、大学側と企業側で、必要と考える能力要件に質的な違いが生じていることを示唆するものと捉えています。この変質すなわち「段差」をもたらしている背景に目を向け

➡➡➡ 中面へ続く

心理支援・カウンセリング分野に おける実務家教員について

中京大学
心理学部 教授
神谷栄治



最近新聞などでよく話題になっていますが、今、日本の社会では家庭で虐待的な扱いを受けている児童の数が増えています。これに対して、社会的支援の仕組みや方法をより改善し、より多くの児童が(そしてその親が)適切に生活サポートを受けられるようにすることが社会的課題になっています。また、現在の日本では、女性が不当な扱いを受けたり、精神的・身体的・性的な加害(ハラスメント)を受けたりしている実態があるのに、それに対してサポート体制が不十分であるという実態も指摘されています。さらには、身体的・精神的・発達のななんらかのハンディキャップのある方や社会的にマイノリティの方も、適切な配慮や便宜が受けられず、実質的に差別的扱いを受けているのに、十分な支援が提供されていない、またそうした仕組みが不十分であるという実態があると思われます。

現場で経験を重ね、 支援のノウハウを体得

このような社会の現状のなかで、こうした方々の心理的支援の業務にたずさわっている方は実はかなり多いと思われます。いくつか例を挙げてみます。たとえば公務員として、児童相談所で、児童の支援にあたっていらっしゃる方がおられます。また非行少年のほとんどが実は家庭での不適切な養育の被害者という

側面を持っていますが、こうした非行少年の処遇の判断に関わっているのは家庭裁判所調査官です。虐待を受けた児童は、児童養護施設に生活の場を移すケースもありますが、そこで、生活を支援する職員の方もおられます。また15歳以上で事情があって家庭で生活が送れない若者の生活支援の場として、自立援助ホームがありますが、ここで若者の生活を支援しているNPO等のスタッフの方がおられます。さらにまた他にも女性支援施設や犯罪被害者支援センター等で、スタッフとして日々支援にあたってられる方もいらっしゃいます。こうした方々は、日々現場で、さまざまな苦勞を抱えながら支援の経験を積み重ね、そのノウハウを体得しているわけです。

経験に基づく知を次世代に伝える

視点を変えてみますと、私は心理学部の教員ですが、多くの若者が対人援助職に就きたいという思いを抱いて心理学部に入学してきます。学生は人の役に立ちたいという志を強く持ちながらも、実際に人を支援することの困難さについては経験的理解が当然まだありません。私が、授業のなかで支援の実例を話すと、理論的抽象的なトピックとは違ってかなり興味を持って学生が聞き入ることがよくあります。

対人援助職に就きたいと思っている学生が、より現場体験に基づいた学びを求めていることは、心理学部の教員として強く感じています。そうした現場に密着した学びを提供できるのは、先ほど挙げたような組織・機関で支援の経験を積んでこられた方々だと思います。経験に基づいた知を、きちんと次世代に伝えていくことは、実務家教員の使命といえるでしょう。対人援助職として働いてこられた方が、その経験を伝承する機会がアカデミズムの場ではこれまで限られていたきらいがありましたが、実務家教員養成プログラムがその突破口となる可能性を期待し、それを支えていきたいと考えています。

進化型実務家教員養成プログラム Web サイト <https://teep-consortium.jp/>



